

# 花

# 鳥

## 京都市美術館所蔵品展 花鳥風月 スペシャルトーク

金剛流若宗家 金剛 龍謹さん × 植治次期十二代 小川 勝章さん × 未生流笹岡家元 笹岡 隆甫さん

新年を飾る「京都市美術館所蔵品展 花鳥風月」を、美術館「えき」KYOTOで開催しています。京都市美術館の膨大なコレクションの中から「花鳥風月」をテーマに選りすぐられた近現代の日本画、洋画、工芸品36点を紹介。本展を記念して、作家で植治次期十二代の小川勝章さん、華道家で未生流笹岡家元の笹岡隆甫さん、能楽師で金剛流若宗家の金剛龍謹さんに、日本文化の底流にある花鳥風月を愛でる心から、自身の自然との関わり、気になる出品作まで、大いに語っていただきました。



自然の移ろいを  
鋭敏に捉えた  
京の名品を見る

撮影協力平安神宮

The Special Exhibition of Masterpieces from Kyoto Municipal Museum of Art  
Beauties of Nature

### Profile / プロフィール

右/華道「未生流笹岡」家元 笹岡隆甫(ささおか かつらふ) 1974年生まれ。京都工芸学部建築学科卒業。2016年G7伊勢志摩サミットで会場装花を担当。京都ノートルダム女子大・大正大客員教授。京都市教育委員会委員。京都市「DO YOU KYOTO?」大使。近著に「いけばな」。

中/植治次期十二代 小川勝章(おがわ かつあき) 1973年生まれ。十一代小川治兵衛に師事し立命館大学文学部卒業後、植治の作風に専念。京都精華大等で非常勤講師を歴任。京都市「DO YOU KYOTO?」大使。京都精華大評議員、エフエム京都放送番組委員会委員。

左/金剛流若宗家 金剛龍謹(こんごう たつしん) 1988年生まれ。同志社大学文学部卒業。父・二十六世宗家金剛永徳、祖父・二世金剛龍に師事。5歳で住持「観々」にて初舞台。10歳で能「若船」にて初シテ。京都市立芸術大非常勤講師。(公財)金剛能楽堂常務理事。

### 屏風絵に感じる 奥深き松の世界

小川 今日私の先祖・七代目小川治兵衛が手掛けた平安神宮 神苑に来ております。参道には黒松が、お庭には赤松が多く植わっていますが、私、松が大好きで、息子に松にちなむ名前をつけたほど(笑)。日本は沿岸や山に松が多く、お庭に松が1本でもあれば自然とつながれる。常緑樹の松は、お庭における四季の物語のベースをつくる、大切な存在でもあります。

笹岡 私は職業柄、庭を見ると「あの枝いいなあ、いけたいな」と思ってしまう(笑)。松はいけばなのルーツにも関わり、常に緑をたてる長寿の木は古来、神が宿る依り代とされてきました。正月に門松を飾る文化は、松に神様が宿り、そのご加護で一年健康で幸せに暮らせますようにと祈ったことに由来します。同じように家の中に松を飾ったのが、いけばなのルーツの一つです。元日には松、2日には竹、3日には梅をいけます。

金剛 能楽師にとっても松は大切なもの。能舞台背後の鏡板に必ず描かれる老松は室町時代、大和猿樂四座が奈良・春日大社の影響の松の前で演じたのが起源。平安神宮近くにある京都観世会館の鏡板は堂本印象作です。

笹岡 堂本印象といえば今回出品の《松楓和鶴》。松と楓が屏風の左右に描かれ、陰陽のごとく表情が違って面白い。特に松の屈曲した枝の力強さにひかれます。

金剛 私は能の演目「鉢木」を連想しました。大雪の日に一夜の宿を乞うた旅の僧に、零落した武士である主人公が秘蔵の梅・桜・松の鉢木(盆栽)を切って薪にし、暖をとってなす話。寒々とした風情が、武士の清厳さを描く「鉢木」の世界に通じるように感じました。

小川 しなやかさと力強さを兼ね備え「こんな人になりたいな」と思わせられる、すごい松です。

### 花や鳥に向けられた まなざしと美意識

小川 今回、上村松篁・淳之先生親子の作品が並ぶのもうれしいです。幼い頃お庭

のお手入れについて行きましたら、松篁先生宅には折々の写生のためのお庭があり、淳之先生宅にはたくさんの鳥がいました。お二人の作品には自然から教えていただく予定調和ではないもの、何気ないいつもの表情のようであり、予期せぬハレの表情も描かれている気がします。

金剛 淳之先生は金剛流で謡のおけいこをされていたご縁もあります。先生が指導されていた京都市立芸術大の日本画専攻では、学生が鳥の世話をし、描く課題があるそうです。

笹岡 両先生の作品は本当に優しい。見ていて自分自身も優しくなれるような柔らかさがありますね。

金剛 能装束も手掛けられた竹内栖鳳先生や谷口香嶠先生の作品もありますね。谷口先生の《實方花下遊雨図》の桜は、花は少く余白が見事。能でも桜が題材の演目は多いのですが、印象が強い花は舞台にあまり出さない。でも名人が演じると何もないところに満開の桜が現れる。見る側に想像させるというのは、日本の伝統文化に共通する楽しみなのでしょうね。

笹岡 桜は百花の王です。いけばなでは通常、引き算をして枝ぶりを見せるのですが、例外的に花を主役とするのが桜。それだけ豊富な花の優しさが、日本人の心を打つのだと思います。そして散りゆく姿まで美しいと感じるのも、日本人の美意識ですね。

### 自然が教えてくれる 豊かな時の移ろい

小川 お庭に携わるときは新たな大地で根付いていく事を願い、大地に根付いている樹木や、山や川の中から顔を覗かせている石などをあえて掘り起こし、植付や据付を行います。そのようにしてお庭を造るのは、人が自然との繋がりを求めているからだろうと思います。年々樹木のボリュームは変わり、お庭も移ろっていく。木や鳥は雨の恵みに喜び、竹内栖鳳《驟雨一過》にも、雨が降ったあとの移ろいが描かれています。今回の作品の数々は、一瞬を切り抜くというより豊かな時の移ろいを教えてくださるようにお見受けします。

笹岡 いけばなでも、いけあげた花のつぼみが徐々にほころぶといった時の流れ、移ろいを大切にします。花は人の生き様を教えてくれる師匠。今回の作品でも、力強い枝ぶりの菊池芳文《藤花》をはじめ、それぞれに違った魅力を抱えた花々に目がいきます。この展覧会が、そうした自然の魅力に気付くきっかけになればと思いますね。

金剛 日本人のDNAに刻み込まれた美意識を、花鳥風月と向き合う作家の作品から感じとれる良い機会。人間は自然から切り離しては存在することはできない——当たり前ですが、そういう意識を改めて持たなければと感じます。



上/菊池芳文《藤花》制作年不詳(部分)  
中/上村淳之《蓮池の冬》  
1995(平成7年)  
下/谷口香嶠《實方花下遊雨図》  
1914(大正3年)頃  
写真左/山鹿清華《手籠犬和之圖》  
1940(昭和15年)(部分)

※掲載作品は全て京都市美術館蔵

# 風



堂本印象《松楓和鶴》1939(昭和14年) 右隻

# 月

企画・制作:京都市新聞COM

京都市美術館所蔵品展

## 花鳥風月

The Special Exhibition of Masterpieces from Kyoto Municipal Museum of Art  
Beauties of Nature

1.20 sun まで好評開催中  
会期中無休

美術館「えき」KYOTO  
Museum「EKI」KYOTO

JR京都駅下車すぐ・ジェイアール京都伊勢丹7階隣接

開館時間 = 10:00 - 20:00  
入館締切 = 閉館30分前

※但し、百貨店の営業時間に準じ、変更になる場合がございます。

京都市美術館は1933年に設立され、建築当初の面影を残す日本国内有数の歴史ある大規模公立美術館です。京都における文化施設の中核的な存在として京都市民から愛され、近現代の日本画・洋画・彫刻・工芸・書・版画など約3,500点を所蔵しています。本展覧会では、2019年度中のリニューアルオープンに向け、現在本館が改装中である同館の所蔵品のなかから新春にふさわしく晴れやかな「花鳥風月」をテーマに日本画、洋画、工芸作品36点を紹介します。

入館料(税込) = 一般900円(700円) / 高・大学生700円(500円) / 小・中学生500円(300円)

※( )内は「障害者手帳」をご提示のご本人さまと同伴者1名さまの料金。

主催 = 美術館「えき」KYOTO、京都市、京都市新聞 協力 = (株)便利堂



竹内栖鳳《驟雨一過》  
1935(昭和10年)

ギャラリー・トーク (会場)美術館「えき」KYOTO ※各回約30分

1月13日(日) 午後2時から 山田 諭氏(京都市美術館 学芸課長)

14日(月・祝) 午後2時から 今森 光彦氏(写真家)

※マイクを使用し、会場内を移動しながら解説いたします。  
※事前申込不要。ご参加は無料ですが、美術館入館券は必要です。  
※遅刻した際は、入館制限をさせていただきます場合がございます。

美術館「えき」 KYOTO

お問合せ ジェイアール京都伊勢丹  
TEL.075(352)1111 (大代表)

美術館えき 検索